浅野　愡　会員

学生のころ，自治寮の一角にモンマルトルと呼ばれるところがあって，異様な風体の連中が出入りしていた。モンマルトルはそもそも取り壊し寸前のボロの空き部屋を誰かが見つけてきたもので，住人たちは雨漏りをよけながら夜ごと酒をくみかわし，女を語り，絵を語った。扉はカンバスになり，破れたガラス窓にはカルトンが打ちつけられた。それでも住人たちははじめて持つアトリエに感激し，この一角をこよなく愛した。その住人の第1号が浅野　愡氏である。他には渡辺真利，千葉光男，萩原卓也，斎藤洪人らがいたが，鋭い眼光と仙人のような風貌の浅野氏はユニークな存在であった，浅野氏のアトリエを訪問するのは，このモンマルトル以来のことである。

浅野氏のアトリエは北33条にある，7年前の新築のころは，まわり一面が草原であったというが，今は新しい住宅やマンションのまっただなかである。

アトリエは11畳ほどの細長い部屋で，特に机というものが無い。必要に応じて折りたたみのものを出したり，大きさによっては木製のゴミ箱を横にして使用するのが都合よく，椅子は使わず常にあぐらが一番ということである。たしかに，あぐらのまま手を伸ばすと何でも取れるように道具はすべて床に近いところに，所せましと置いてあるのが面白い。

カット・藤本　俊子

部屋に入って先づ目につくのは，窓ぎわの大きな天体望遠鏡，棚にはステレオのアンプの二階建，左右に大きなスピーカーのはめこみ，後方の壁には小さなスピーカーが二つかけてある。ちょうどアトリエ全体が音響室になっているのである。

とにかく，登山，写真，ステレオつくり，天体観測とやることが多く，こうしたものの中で仕事のイメージが湧くことが多いという。「私はもともと 版画の 複数性を重視しないし，一点でもよいから版をとおして納得のいくものが表現できればよいと思っています。今年は具体的なものの形を残して，自然に徹した作品を作ってみようと取りくんでいます」と，静かな彼の話し方，凹んだ眼の奥からの射るような鋭い視線は，やはり20年前のモンマルトルのそれであった。

帰りぎわふと目をやると，小さな港の絵がかかっていた。「これは沓形の港で，住んでいた部屋の 窓から 見たところです」という。よく見るとステレオアンプの上に漁師が使う小さなガラスの浮き玉が置いてあった。新婚のころ，生まれたばかり長女と3人の利尻での3年間の生活は，彼に鋭い自然への眼をはぐくみ，自然との純粋なかかわりの中で作品をつくっていくという，彼の制作の基盤を形成したのであろう。その長女はいま中学3年になる。

訪問者／斎藤洪人　会員

小野垣哲之助　会　員

小野垣さんのアトリエは，彼の画家生活としての大変重要な場であった。それだけに彼の体臭のムンムンした所でもあった。

彼はこのアトリエで，1日の大半を過ごすそうだ。アトリエのあちこちにはストーブ，お茶のセット，紅茶，コーヒー，ポット，茶碗，水筒，ラジオ，ランプ，火ばさみ，カバン，カメラ，種々袋類，枕，寝具（？），隣には畳の部屋までセットされ，ドアーは内側から鍵がかかる。不自由な物は一，二考えられるが完全独立の構えだ。

彼は毎朝，神宮の森の鳥たちと同じ頃に起きる。大体4時頃だそうだ。朝食前に外に飛び出し，絵を一枚かたづけてくる。朝食後，奥様との対話のあと自分の城に登り（アトリエは2階にある），何やら始めるらしい。アトリエにいるから絵を描いているとは限らない。早朝，鳥の活動開始と同時の日程だから，寝不足で昼寝をしているかもしれない。お茶ばかり飲んで，物想いにふけっているかもしれない。でも，奥さんも娘さんも，そんなことはどうでもいいらしい。

彼はあの小さな体で，エネルギッシュに絵を作っていく。「絵を描くのが絵かきなんでネ――，ハハ……」の調子である。そんなに楽天的な彼でも，時たま呼吸困難の発作を起すことがある。ゼンソクの持病があるとはかつて聞いたことがなかったのだが，多分一種の精神的病いであろう。彼はすぐに下に降り庭をいじりだす。症状の重いときは，神宮の森をウロチョロする，薬などは必要としない，彼の病気は，不思議にもそれで全快するのだ。

以上のような画家・小野垣哲之助氏のごく平凡な生活の断片を書いているうちに，私は，彼のアトリエとは最も居心地のよい，しかし最も居心地の悪い，神宮の森がなくては意味のない場所であることを知ったのである。

訪問者／谷内　丞　会　員

後　藤　庸　也　会　員

某月，某日。札幌は三角山のふもと西区山の手の閑静な住宅地にある彼のアトリエを訪ねた。手入れのゆきとどいた付近の家の中で，雑草がぼうぼうと生え繁っている。「これが自然のままで一番優雅な庭なのだ」と彼はクックックと笑う。なにしろ夏ともなれば，それこそ雑草の伸びるにまかせて無人の館の態となり，後藤庸也君の家であることが一目瞭然である。

居間に通される，瀟洒なシャンデリアの下，大は河馬，獏，ラクダ，熊，牛，人間（これは未だなかった）。小に至ってはトカラ山羊，チンパンジー，イタチ，はてはネズミの頭蓋骨がところせましとならべられていて，異様な感じがしないでもない。おおよそ，彼のロマンチッ

カット・蛯子善悦

クな抒情的ともいえる絵からは，とうてい想像もつかない雰囲気の中で，まことに気儘なやもめ暮しを楽しんでいるのである。

扉を開ければ15畳のアトリエ，これまた足の踏み場もない位のちらかしよう。隅には場違いの感じのグランドピアノ。制作に疲れると鍵を打ちならすらしいが，彼の迷演奏を私はまだ耳にしていない。

この雑然とした中で撫然とした顔で，「俺は遅筆なので陣痛が長いんだ」とのたまう。事実エスキースをとり，デッサンにかかるまで時間がかかり，1枚の絵も何カ月もかかり，訪ねる毎に，画面は変貌に変貌を重ねる。彼はよくいう，「俺の血の中に流れているものは何なのだ，それを見極めてゆくことが俺の絵の原点なのだ」と。こよなく焼酎を愛し酔いしれると自虐性をおび，時として破滅型人間となり，手に余すこともしばしばあるが，私にとっては肝胆相照らすよき友である。

去年の秋，彼は山陰旅行に出かけたが，帰ってきて名物のヒゲを悌落して皆を驚ろかしたが，その理由は黙して語らない。

訪問者／
竹内　豊　会員

カット・竹内　豊

高　野　次　郎　会　員

「きのう東京から帰ってきてね」という電話で，早速アトリエ訪問ということになった。中島町の，割に交通量の多い街角の大きな病院（お嬢さんの嫁入り先）の別棟に高野さんのアトリエがある。門のわきに大きな犬小屋があって，中のコリーがお勤めのように訪問者をほえ立てる。門から玄関まで続いている木立ちや花壇は，その家の主の優しさがよくあらわれており，手入れの行き届いた花々は，5月の雨にぬれて美しかった。

アトリエは，12,3坪はあろうか。まわりのよく整理された画架には，いま制作中の作品が2，3点。広い壁は30数点の大小の作品に埋まっている。昨年暮れから今年にかけて描き貯めたこれらの作品群は，高野さんの，年齢を感じさせない熱情のあらわれであり，描くことがしんから好きな人であることを物語っていた。作品は，数年前に奥さん同伴でヨーロッパに1年余り滞在したときのものが多く，貪欲に描きまくったというスケッチブックが，画架の傍にうず高く積んであった。

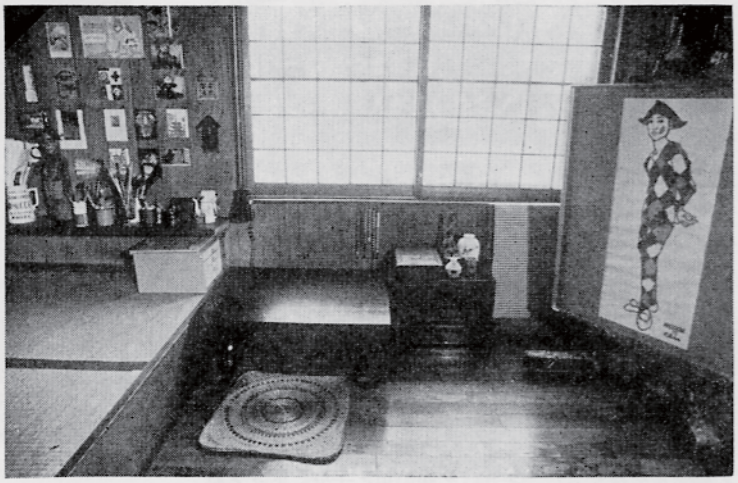
アトリエの戸棚には，ヨーロッパ滞在中に買い集めたという民芸品や骨とう類が無雑作に置かれてあって，かざらない人柄をよくあらわしていた。古いコーヒーひき・ユーゴの琴・ガンダラ仏（インドの骨とう）・コペンハ

ーゲンで求めたというランプ型のウイスキー入れ，ｅｔｃ。見ているだけで楽しい。〝のみの市〟を散策する高野さんの姿を想像させる品物でもある。ドアの鈴の音が印象的であった。

「僕はずぼらだから」と謙遜されるが，気が向けば制作活動が深夜にまで及ぶことも珍しくないという。左甚五郎的名人気質とでもいえそう。しかしご本人は，「絵かきは職人になるべきだ」とおっしゃる。雨や雪の中で何時間も絵を描き続けたという話は，私たちに強い感銘を与えたものだったが，40余年ただ黙々と自分の絵を描き続け，いわゆる無償の行為に情熱を傾けてきた高野さんの絵は，若々しさと同時に，この人らしい真摯さを感じさせる。もう一度ヨーロッパに出かけたいとのこと。高野さんの意欲に圧倒されて，おいとまをした次第。

訪問者／石塚　潔　会員

版七工房訪問記



片方が畳3畳の小上がり。水拭きされた板の間に，欅（けやき）の仕事机，小箪笥，わら座布団，長火鉢に鉄瓶といった道具立て。板壁には曲尺，定規，木槌，刷毛の類。棚は，版下，バレン，竹の皮，版画刀，中国日本の筆墨硯，研石，絵具皿，筆洗，和紙，スケッチブックや何かでいっぱい。

どう見ても，画家のアトリエというより，職人の仕事場といったフンイキ。

壁にかかった額の豊国の版画は本物らしい。もう一枚の，平塚運一画伯の「内金剛万瀑洞」の木版画の右肩に，千葉七郎様恵存，第十四回国画会展出品，平塚運一，とある。

ここのあるじ，何を考えてか昨年1月，長年の油絵をやめて版画専門を宣言した。もっとも画学生の昔，講習会で，日本創作版画の祖，平塚運一先生に手ほどきをうけて以来，一頃木版画に傾倒，公募展の初入選は木版画であった，というから，版画の素性は万更怪しくもないのだが，今頃になってスッパリと油絵をやめたというのは，体（てい）のいい店じまいではないかと，小樽画壇では専らの評判。

本人にいわせると，パリのルーブルでゲッとする程西洋の油絵を見たあとで，セーヌ河畔の古本屋の店先の，春信の秋風二美人を見て，その明快で清澄な美しさにあらためて仰天。さらにドイツロマネスクの素朴な木版画に驚嘆。どういうわけかアムステルダムの飾り窓で，西洋女を抱き乍ら版画開眼にいたったというウソのようなお話。これを機会に椿屋版七と改名。現在全道展のマリヤ十五玄義につづいて，キリスト受難の十四留を制作中。「今に見ていろ，油絵なんぞ手痛い目にあわせてやる」と，いささかヤクザめいた版七先生のセリフに恐れをなして退散した。

訪問者／千葉七郎　会員

編集係から一原有徳氏訪問を依頼されたのですが現在入院中で取材をことわって来たので自画像まがいの自宅訪問としました。千葉

山岡三秋 会員

「私のこれからの仕事は，北海道の地についた焼物をつくることだ。自分自身の手で，自分自身の作品を，北海道の風土にさからうことなく，一つ一つ丹精こめて作り出す。土という素材を殺さず，荒い肌の中に繊細な魂を入れなければならない。私のこれからの仕事は，模索の始まりだ……。」

こぶ志焼きの名で道内はおろか内地にまで知れわたっている山岡三秋氏は，私などには足もとにもおよばぬ情熱をもってこう語る。田園に囲まれた岩見沢の一隅，山岡氏のアトリエで熱っぽい芸術論が続く。ちり一つなく掃き清められた大きな仕事場の中では，おびただしい素焼きの作品が空間をうめ，焼き上ったばかりと思われる窯の余熱がその空間を暖める。若くして安井曾太郎(絵)新海竹蔵（彫）らと共に満洲図展の鑑査にあたり，長い窯芸研究所の生活を経て岩見沢に独自の窯を築き上げた著名な老作家と，かけ出しの若ぞう彫刻家との妙な組合わせは，まるで親にさとされる子供のようなものにちがいない。

「これまでの私の仕事には，商品の数が多すぎた。これからは今まで以上に自分自身の心から生れる作品を作らなければならない。」

という作家としての反省。それのみではおさまらぬ工芸品としての原点「用をともなう窯芸が，芸術品としての価値を発揮する時‘それは客観の用に十分に応える時だ……。」という確信。

カット・顔／栃内忠男

つい1カ月程前に山岡氏は愛妻をともなって，本州の窯めぐりをやってきた。千葉にはじまり，茨城，鎌倉，愛知，奈良，京都，東京，福島，宮城，山形などを歩かれている。「窯芸作家としての典型を模索した。模索の第一歩である。」と氏はいう。あるいは氏自からの生き方の正しさを，再確認してきたのかも知れない。

「腕をみがくことをせず，二，三の作品ですぐに作家になりたがる。そして作家気取りになる。己れ自らを知れ……といいたい。」若手窯芸家に対する氏の助言である。2時間程の会話の間に，多くの窯芸愛好者が訪れていた。これだけの愛好者が訪れるのは，まんざら窯芸ブームの波にのった観光客ばかりではありますまい。そしてこの会話中，氏の奥様はそばの椅子に腰をおろし，にこやかにこの会話を聞かれていた。外は雨……。

47年5月15日

訪問者／峯田敏郎　会員